



カトリック町田教会
町田市中町 3-2-1
電話 042-722-4504
FAX 042-722-4512

いかずちの子

<http://www.machida-catholic.jp/>



8月15日は「聖母被昇天の大祝日」
ピオ12世は1955年に天の元后聖マリアの
記念日を定めた。天にあげられてからマ
リアは元後の栄光に与った。ご自分が予
言したとおり(「今から後、いつの時代の
人々もわたしを幸いなるものと呼ぶでし
ょう」ルカ1:48)人々の償いと尊敬を受
けられるのです。

聖母被昇天にあたって

主任司祭 高木 賢一

ルカ福音書の記述に基づけば、マリアは当初、大天使ガブリエルの告げた内容にためらったということになるが、この場面はとても大切だと思ふのである。

そして、このためらいの後、自らの意志でこれからの歩みを選ぶという振る舞いこそが、私たちに与ったメッセージ・道しるべになってい

ると言っても決して過言ではないだろう。ほとんどの人が大なり小なり体験する「ためらい」をマリアにも見ることができるところこそ、私たちキリスト者の本当に身近な模範になり得たのであろうし、そうであったからこそ、私たちの「母」と宣言することに何のためらいも感じないのだろうと思う。

もちろん、教会は別の理由でマリアに「聖母」という称号を与えているのかもしれないが、個人的には、この「ためらい姿、しかし最終的には神のみ旨に沿うように歩んだ姿」に親近感を覚えるし、道しるべ的な存在に思えるのである。

その意味で、聖母マリアの姿に浮かび上がる人間像は、大変力強いし、逞しさすら窺えると言えよう。こういつた地に足のついた姿勢はどこに由来するのであろうか。当然、父である神への信頼の深さに基づくと言えるだろうが、この結論を現代に合うように言い換えると、父である神が示す「明日」に向けた深い信頼、およびその「明日」に向けて、「今」を歩む在り方への深い自覚に基づくと言えるのかもしれない。

そして、そういった姿勢は、いわゆる旧約聖書の底流にも流れていると言えるであろう。即ち、ユダヤ人たちの出発点は、今風に述べるならば、イスラエルの歴史の中で最も悲惨で、最も惨めに思えたバビロン捕囚に至る経緯を繰り返して振り返る「失敗の研究」であって、イスラエルの歴史の中で一番輝かしく思えたダビデ王朝の隆盛に至る経緯を

振り返る「成功の研究」ではなかったはずである。これからの新しい時を歩むに当たって、その新しい時の意味の重大さを深く深く自覚していたからこそ、二度と同じ過ちを繰り返してはならないという思いを込めて、自分たちユダヤ人たちがそれまでどれほど頑なで、またそのために神をどれほど怒らせ続けたかということ、偽らずに繰り返して述べ続けたのである。

また、そういった自分たちの作業が自虐的で、自分たちの心をますます萎縮させるだけであるとは、決して考えなかつたであろう。ところで、今の日本においては、自分たちを鼓舞すること、もう一度自分たちに元気が戻るようにしようという試み、ある意味、涙ぐましい試みがなされている。

明治維新に至る動きの中で活躍した人物をドラマ化する、あるいは、日本の近代化がいかに素晴らしかったかをドラマ化するというのは、そのよい例である。

しかし、そういった試みは果たしてどうなのか。また、今の日本の原点はそこなのだろうか。

子どもの頃に母親から褒められて、また頑張ろうとする



メンタリティーに、どこか似ていないだろうか。一時的なカンフル剤宜しく元気になったとしても、改めて、自分たちが勝ち取ったのではなく、やっとの思いで与えられた新しい時に対する深い自覚を持つとしなければ、これまでと同じ歩みを繰り返すだけであらうし、また同じように、一時的なカンフル剤を欲しがらばかりなのかもしれない。

いつまで経っても、いわゆる「乳離れ」できないメンタリティーでは、単なる「駄々っ子」的な存在にしか見られないように思ふのである。と同時に、新しい時を深い決意で生きていくとしても、過去に対して感情的なアレルギーのままであるならば、表面的には正反対のようであっても、同じ穴のムジナ、同じ土俵でモノを語るだけに終始するので、いつまで経つても頭でかちの理念先行、いわゆる「きれいな事」でしかモノを語れないのかもしれない。

聖母マリアに描き出される地に足のついた力強さと逞しさにについて、改めて思い巡らしてみたい。

らげる共同体になるよう、皆様に教えていただきながら、微力を尽くす所存です。

二つの黙想会

ヨゼフ会黙想会

坂井 剛

「黙想会は有意義でした」と報告するべきなのでしょうが、敢えて「楽しかったです」にさせて下さい。ヨゼフ会員にとっては、遠い遠い昔の記憶の中にある両親から離れる楽しい「お泊り会」に似ているからかも知れません。

指導司祭は高木神父、参加者は十七名、場所は汚れなきマリア修道会でした。

今回の講話のテーマは「主日の福音から」、黙想会が行われた五月三十日(日)主日の福音は「三位一体」でした。

小泉政権時代よく使われた「財政の三位一体改革」の報道、三位一体という言葉は多くの方に知れる事になりましたが、使われ方に違和感を感じていました。

父と子と聖霊の三位一体はカトリック信者の私たちにとって信仰の中心をなす教えです。講話の中で「三位一体は長い歴史の中から確立された教義で、ある時期に突然三位一体の教えが出てきたわけではないのです。」「そうなんだ」「還暦を過ぎ、世の中の事

は凡そ解っている、どうにかなるものだ、新たな知識を得ようとしなかった自分を反省しました。本当です。

昨年から黙想会にミサも取り入れられ、朝夕の祈りの時間とともに静かに黙想することが出来ました。

黙想会の楽しみである「お泊り」は、まくら投げこそしませんが、利害関係のない男同士の非日常的な楽しい「井戸端会議」になりました。海外勤務で感じた事、仕事を通して考えた世の中の動きとカトリック教会の事など、話題は多岐にわたりました。

都合で参加できなかった成人男子の皆さん、黙想会は絶対にお買い得です！ 来年の予約は今からヨゼフ会会長が受け付けるそうです。

ウエルカムテーブル

黙想会

池田 克久

六月十一日金曜日午前十時から、本町田にある汚れなきマリア修道院でウエルカムテーブル主催による一日黙想会が行われました。指導司祭はカブチン会ペトロ神父様で、ユーモア溢れるその語り口と日常生活で起こり得る具体的なお話は時間の過ぎるのを忘れさせ、何時間でも聞き入り

たくなるものでした。

午前中の講話では、義母と妻との関わり、交通事故の加害者と被害者との間での心の葛藤といったお話の中で、赦すことと赦されることについて、考えさせられました。

コーヒーマスターはカブチン会に由来するというお話も面白いものでした。聖体拝礼の後、昼食となりましたが、その間もペトロ神父様は聖堂後方の準備室で告解希望者を待ち、具体的な告解に耳を傾けておられました。昼食の時間は参加者同士でシスターたちの手作りによる魚料理を食べながら、和気

あいあいと話が弾みました。

昼食の楽しいひと時の後、聖堂でミサと祈りの大切さを5項目に分けて話されました。

修道院聖堂のステンドグラスを透過した陽の光が、床面に柔らかく映し出されています。少人数で、落ち着いた雰囲気にも包まれた中で行われたミサは、日常生活から少しばかり離れて、ゆったりと感じられました。二十五名程の参加者はそれぞれの思いを持って修道院を後にしたと思います。毎日繰り返される日常生活の中で、信仰を振り返る良い機会になったと思います。

ワンポイント聖書



(17)

前島 誠

ハレルヤハ(主をほめたたえよ)、わたしは心を尽くして主に感謝する

主の御業は大きく

それを愛する者は皆それを尋ね求める

(中略)

主を畏れることは知恵の初め、

これを行う人はすぐれた思慮を得る。

主への賛美は永遠に立つ。

詩篇第111編1、3、10

「ハレルヤ」という詩句はハレル(賛美せよ)、ヤハ(主を)という意味の掛け声で、詩篇の中に何回も登場します。

104、105編のように結びに使われることもあれば、106編のように歌い出しに使用されるものもあります。今回引用した111編は、

その冒頭に「ハレルヤハ」と声高に唱える作品とご承知おきください。

さらにこの111編は、ヘブライ語のアルファベット二十二文字を各行の文頭に使用した、めずらしい詩篇でした。原文をこちら

ください(●印がその文字)

(A) オデー・アドナイ、主に感謝、

(G) ゲドリーム、御業は大きい、

(D) デルシーム、尋ね求められる、

(R) レシット、知恵の初め、

(Sh) セヘル・トヴ、良き思慮が、

(T) テヒラト、主への讚美、

一部だけの引用になりました。全体は、

自分で確かめください。(箴言1章7参照)



最後にペトロ神父様ご推薦の書をあげておきます。『パドレ・ピオ 希望の人』(発行元祈りの園) 信徒ホール図書コーナーに貸し出されていなければあると思います。

終戦記念日に寄せて

戦時下、憲兵を退散させた
中田藤吉神父

橋本 昭男

私の成長期には常に戦争がついて廻りました。

誕生年の一九三二(昭六)年は満州事変、一九三七(昭一)年日華事変、そして一九四一(昭一六)年には太平洋戦争と、戦争戦争の連続でした。

終戦の一九四五(昭二〇)年八月十五日は、疎開先の平戸市田平町で迎えました。

真夏の太陽がじりじり照りつける暑い日でした。前年、神戸市からいわゆる学重疎開で父祖のこの地へ移転していた私は、この日十四歳になっていました。

学校では授業らしい授業もなく「撃ちてしまわむ」のローガンのもと連日、開墾、農作業等に従事する日々でした。ひ弱な少年には、きつくつらい仕事でした。

終戦間近の七月には、この

地もロッキード戦闘機に銃撃され、海峡の船舶や果立種畜場、田平教会等が被害にあいました。

この海峡は、四百数十年の昔、聖フランシスコ・ザビエルも航行した海でした。

当時の田平教会主任司祭の中田藤吉師(後の仙台司教浦川和二郎師の同期生)は大きな目玉の剛毅な神父で、詰問しに来た憲兵を論破して退散させたという逸話の持ち主。

このことを浜崎勇氏は、同教会誌『瀬戸の十字架』で概略次のように記しています。
「...戦時中のある日、憲兵がやってきて言うに『外国の神を拝み、外国の着物を着るとは言語道断、直ちにスータンを脱ぎ袴(かみしも)を着用せよ』とつめよつてきた。

中田神父は怒って『君はそういうが今日の文明の利器や兵器はどうだ。汽車も電車も飛行機も、みな外国からきたものではないか、しかも通信に必要な無線電信は、イタリアの熱心なカトリック信者マルコニーが発明したものだ。君の着ているその服も靴も靴下もだ、外国からきたものがそんなに悪ければ、君、素っ裸になり、フンドシ一つになつてものを言え。兵士も羽織はかまにワラジを履き、日本刀で戦え、しからは私も裸に

なろう』と言いつつ放った。

軍の威力を背景に、横柄な態度の憲兵は、ほうほうの体で逃げ去った』という。

同教会の庭には、この中田師の胸像が、いまも教会を見守っています。平和に感謝!

金 献 犠
中高生会

6月6日 6,829円
(ペロニカ苑へ)
7月11日 12,106円
(ペロニカ苑へ)

「雷の子」次号編集会議予定

8月29日(日)09時30分

於会議室

お詫びと訂正

「雷の子」281号に次の

誤表記がありました。お詫びして訂正いたします。

2ページ「黙想会を準備して」の明星幼稚園↓みょうじょう幼稚園

3ページ「実行体制」図書業務の高橋壇↓高橋檀(まゆみ)

紙質変更について

「雷の子」が「ト」紙に変更になりました。印刷会社のご協力を得て、わずかな値上げ幅で紙質改善が実現した結果です。懸案だった写真やカットの画質が少しはよくなるのでは、と期待しています。

信 者 動 静

2010年5月~6月

(個人情報のため、削除しています)